

診断あきた

◆発行 社団法人 中小企業診断協会 秋田県支部
〒010-8572 秋田市山王3丁目1番1号 県庁第2庁舎
秋田県企業支援センター内
TEL018-860-5512 FAX018-823-8257
E-mail jsmeca05@ma3.justnet.ne.jp



平成14年3月15日

第9号

平成13年度 理論政策更新研修 開催

平成13年9月8日(土) みずほ苑を会場に開催しました。日程は次のとおりです。

「新しい法律と施策について」	(財)あきた産業振興機構 経営革新推進課長 柿崎博美 先生
「中小企業のIT活用診断」	中小企業総合事業団 IT推進アドバイザー 佐藤善友 先生
「新製品等の開発戦略」 ～秋田県地域結集型共同研究事業の現状について～	(財)あきた産業振興機構 地域結集型共同研究事業推進室 参事 高橋幸治 先生



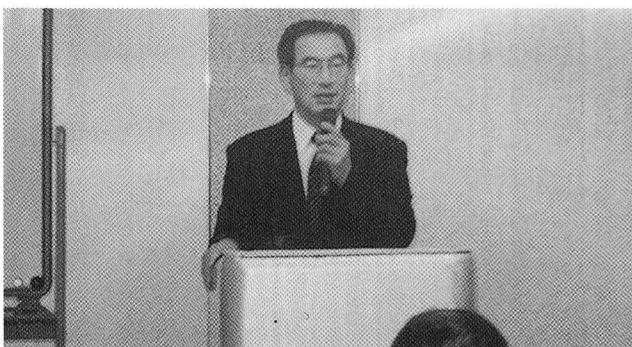
【(財)あきた産業振興機構 柿崎課長】

「経営安定対策」「創業・ベンチャー企業支援と中小企業の経営革新」「中小商業対策の概要」などについて解説していただきました。



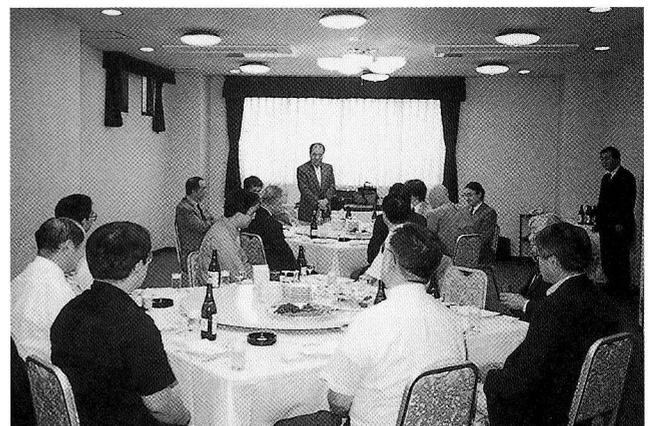
【中小企業診断士 佐藤先生(支部会員)】

「システム構築から戦略構築への変化」「ITコーディネータの出現」など、事例を交えながら中小企業のIT活用診断についてご説明いただきました。



【(財)あきた産業振興機構 高橋参事】

世界に発信する新しい技術と事業の創生をめざして、次世代磁気記録技術と脳医療応用技術開発を融合させた、秋田県の事業についてご説明いただきました。



恒例の懇親会。工藤副支部長の挨拶に始まり、新入会員の紹介もありました。

新入会員プロフィール

今年度の新入会員を紹介します。なお、伊勢田会員は引き続き宮城県支部所属となりますが、秋田に赴任したのも何かの縁ということで掲載しました。掲載項目は以下のとおりです。

氏名

- | | | | |
|-----------|-----------|--------|---------------|
| ①登録部門 | ②生年月日(年齢) | ③自宅住所 | ④自宅電話・FAX番号 |
| ⑤Eメールアドレス | ⑥勤務先・役職 | ⑦勤務先住所 | ⑧勤務先電話・FAX番号 |
| ⑨主な研究テーマ | ⑩他の公的資格 | ⑪趣味・特技 | ⑫『好きな言葉・座右の銘』 |
| ⑬自己紹介 | | | |



佐藤 善友

- ①情報
②昭和32年8月23日(44才)

- ③〒010-0803 秋田市外旭川八柳1丁目1-14
④TEL (018-868-4724)
⑤gfc@wing.zero.ad.jp
⑥有限会社ジー・エフ・シー 代表取締役
⑦〒010-8572 秋田市山王3丁目1-1
秋田県庁第二庁舎3F
⑧TEL(018-896-7429) FAX(018-896-7847)
⑨・ITを活用したビジネスモデル
・BSC(バランス・スコアカード)の活用
・実践的なビジネスプランの作成
⑩ITコーディネータ・サブインストラクター
⑪テニス
⑫『緩急爽やかに』(大学時代、恩師の工藤正孝先生
が送ってくれた言葉です。)
⑬平成13年4月に、(財)あきた産業振興機構(旧:秋田県中
小企業振興公社)を退社し、経営コンサルタントを営ん
でおります。
機構には丁度20年間お世話になり、その間、平成5年
に情報部門の診断士資格を取得しました。資格取得以前
にも企業のコンピュータ導入等の指導をしており、在職
中には約140社の企業の皆様に対して診断・指導を行
いました。この間に培った診断・指導のノウハウを、民間
のコンサルタントとして生かしたいと考えております。
理念は「Good Friend's Consultant」です。一方的
なコンサルではなく、クライアント様と長いお付き合い
のできるコンサルタントでありたいと思います。
私はコンサルの際に次の3点を心がけております。一
つ目は「現場指導のコンサル」。指導した当日からでも実
践出来る「具体的な行動項目を示すコンサル」です。二
つ目は、「数値で結果を示せるコンサル」。そして三つ目は、
「新たな仕事の仕組みを提案するコンサル」。新たな経営
環境下で通じる、ITを活用したビジネスモデルの提案
です。
まだまだ若輩者ですが、どうぞよろしくお願ひ致します。



野村 重美

- ①商業
②昭和29年2月2日(48才)

- ③〒010-0921 秋田市大町4丁目4-17-504
④TEL FAX(018-866-6284)
⑤fwgh9926@mb.infoweb.ne.jp
⑥商工中金秋田支店 支店長
⑦〒010-0001 秋田市中通2丁目4-19
⑧TEL(018-833-8531)
⑨・経営戦略の策定
・財務診断
⑩中小企業組合士、宅地建物取引主任者
⑪釣り、読書
⑫『敬天愛人』
⑬はじめまして。
昨年夏の異動で東京支部(城西支会)から秋田支
部に転入して参りました。鹿児島生まれの南国育ち
で、子供の頃は「かまくら」のある雪国に憧れてお
りました。秋田の方々の人情が厚いところが郷里の
人と似ており、すぐに秋田のファンになってしま
いました。
赴任後5カ月、あっという間に秋が過ぎ、日増し
に一面が白くなるにつれて人々の生活面のご苦勞や
ご商売の難しさが分かりつつある昨今です。
私は平成8年に診断士の登録後、政府系金融機関
の行内診断士として主に融資審査業務に携わって参
りました。今回、久しぶりに現場に出ることが叶い、
直接お客様のお話を伺える機会を得て喜んでおり
ます。
微力ながら地元中小企業の発展の為に全力を尽く
したいと思いますが、何分不慣れな面が多く、まだ
まだ勉強が必要です。是非とも秋田支部の先生方
のご指導ご鞭撻を宜しくお願ひ申し上げます。



伊勢田 晋

- ① 商業
- ② 昭和34年5月21日 (42才)

- ③ 〒989-3201 仙台市青葉区国見ヶ丘2-9-2
- ④ TEL FAX(022-279-5714)
- ⑤ w830037@Tohoku-epco.co.jp
- ⑥ 東北電力㈱秋田支店
企画管理部門企画立地環境統括リーダー
- ⑦ 〒010-0951 秋田市山王5丁目15-6
- ⑧ TEL(018-863-3151) FAX(018-823-4945)
- ⑨ 資材契約
- ⑩ ・スポーツ観戦 ・現在は週1回アスレティッククラブで泳いでいます。
- ⑪ 『男子三日会わざれば刮目して見よ』
『努力に勝る天才なし』

⑬ 平成11年度に商業部門で登録いたしました伊勢田晋と申します。8月に東北電力の秋田支店に転勤してまいりました。よろしくお願ひ申し上げます。

現在、支店の企画管理部門の企画・立地環境グループに所属しており、主として企画業務を担当しております。出身は青森ですが、自宅が仙台にあるため現在単身赴任中です。

秋田は、観光で2度ほど訪れたことがありますが、住むのは初めてで、男鹿をはじめとした自然の美しさや、本場のきりたんぼ鍋をはじめとしたおいしい郷土料理との遭遇を大変楽しみにしております。竿燈祭りや大曲の花火など全国的にも有名な秋田の伝統文化に触れられることも大変な楽しみです。

今年は秋田の家庭に電灯が灯ってちょうど100年目という記念すべき年です。電気ともども末永くおつきあいいただけますよう、よろしくお願ひいたします。

年男之紹介



『午歳に寄せて』

本間 良一

2002年の5月22日で73回目の誕生日を迎えることとなります。

この70年間はいろいろな事件のあった期間であります。聞かされて知ったことですが、農村経済が不況のどん底、娘を売って生活をしのいだなど、今考えるとぞっとするようなことが現実にあったという。昭和12年に小学校に入学、この年に支那事変、16年大東亜戦争と20年に小学校を卒業するまで戦中でした。物のない時代を過ごして来た小生にとって、現在の生活は別の世界の事としか思えないような感

じであります。

今不況だといひます。いつになれば以前のような生活が出来るかはつきり言ってくれる人がおりません。不安だらけの老後になりそうですが、朝の来ない夜はないと云ひます。将来きつとこうなるとは誰とも言えないようですが、この言葉を信じて生きたいと思ひます。

誰かが言っていました。「静かに行く者は、健やかに行く。健やかに行く者は、遠くまで行く。」と。あせらず、くさらず、根気よく、元気よく、マイペースでこの先を生きたいと思ひています。

幸いにも今年もまた良き友達に守られて、楽しく過ごすことを自らに誓ひます。

協会会員各位のますますのご健勝、ご発展を心からご祈念申し上げます。



研修事業委員会開催

平成13年10月20日(土)秋田テルサ会議室にて「研修事業委員会」を開催しました。

＜委員会メンバー＞

工藤義和委員長 亀谷 實 委員 富野忠雄 委員
佐瀬道則 委員 高橋 彦 委員 古木 智 事務局

各委員からテーマ・講師の候補を出していただき、調整を図りながら12月開催の支部研修会の内容を決定しました。



寄稿



『後三年の役と 八幡太郎義家』

工業経営診断事務所
所長 工藤 義和

I. 後三年の役絵巻

秋田県南に位置する横手市には、今からちょうど九百年強前の平安時代末期に発生した「後三年の役」の舞台となった大鳥井の柵跡である大鳥井公園がある。小生の自宅のすぐ裏手にある閑静で比較的小綺麗な公園で、毎朝散歩が小生の日課となっている。後三年の役の時、当事者の一方である清原氏の居城のあったところで、いわば本店所在地であった。

後三年の役のさなか、戦況の事情から清原氏の本拠地は同じ横手市郊外の金沢の柵に移転した。現在の金沢公園である。清原氏はここで滅びた。現在この金沢公園のすぐ近くに「後三年の役資料館」があり、この資料館のなかに「後三年の役絵巻」が保存されているが、これは本物は東京の国立博物館にあるものを地元の絵師が模写したものであるという説明であった。文化的価値が高いらしい。例の「雁の乱れ」は有名な場面である。

II. 義家落胆の図

この後三年の役絵巻は、後三年の役の状況を物語りふうに描いたものであるが、この絵巻の最後のほうで戦勝者である義家が手紙を読みながら落胆している場面がある。識者の説明によれば、役後京都の朝廷方からきた手紙で「このたびの戦は清原氏の内紛であり、乱闘に加担しただけのもめごとだから恩賞報奨は考えていない」という内容らしい。義家の予算獲得請求に対する回答である。つまり貴方が勝手に戦ったのだから、それにかかった経費は政府としては負担できません、貴方個人で負担しなさいと言われたわけである。その時義家は落胆の余り折角あげた敵将の首級を傍らに捨てて帰途に就いたとある。

さて、そのような事態の政治的或いは財政的背景が気になる。

第一に義家は予め朝廷に対して事情の説明をし、経費の負担について了解をとっていなかったのであろうか。次に、あの時代に中央政界が揺るがしたであろう奥羽の内戦が相当規模のものであり、その收拾について多額の予算を必要とするぐらいのことを政府の要人

が知らないわけがない。源氏に負担させれば事がすむとは安易にすぎないか。

小生は「保元・平治の乱」の遠因がここに潜んでいるとにらんでいる。

III. 平安末期の財政事情

これらの事柄から、平安末期の財政事情が透けて見える。

とにかく朝廷は財政が悪化しており、出来るだけ財政支出は押さえない。地方の治安も究極的には中央の責任だが、義家介入の後三年の役は単なる清原一族の内紛と認定することにより、費用負担の責から逃れようとしている様子がわかる。

一方義家としては、予め朝廷に対する予算措置の申請をしたとしてもなかなか決済が下らないことをよく承知しており、決済を待っていたのでは時機を失すると判断したはずである。

当時は紛争の敵対する双方から予算の申請があり、朝廷のほうでは実際の戦闘で勝利したほうに決済を下すということが日常茶飯事だったらしい。政治の乱れではあるが、この乱れも結局は財政難からきている。

IV. 前九年の役の意味

そもそも後三年の役の火種は、約二十年前の「前九年の役」にある。

前九年の役は、義家の父頼義が出羽（現秋田）の清原氏の力を借りて、陸奥（現岩手）の安部一族を滅ぼした事件であるが、これは安部一族が中央政府に反旗を翻したため源氏の一党に征伐されたことになっているものの、どうも当時の租庸調という税制における安部一族の脱税案件の匂いがする。小生に言わせれば、中央政府具体的には宮城の多賀城府の事実誤認であり、安部一族の脱税というよりは稲作の慢性不作による課税所得の減少という事態だったと推測される。

東北地方においては現在でも裏日本側が比較的稲作に恵まれている一方、表日本側では山瀬による冷害被害が多発する。つまり所得の減少を脱漏とみられたわけである。今でも時々ある話だ。

もしも安部一族が悪質な脱税常習犯だとすれば、事実そのように思われたわけだが、中央政府とすれば悪質な脱税犯を抹殺して代わりに善良な納税者を据えなければならぬ。この場合善良な納税者として、清原一族が新たに安部一族の旧領に配置された。そして新たな納税者が租税を負担するならば、この一連の事件に費やした戦費等の経費は早晚補填されるのである。

ところが善良な納税者である清原一族を安部の旧領に配置しても思うように税収があがらず、結局前九年の役は安部一族の脱税事件ではなく、稲作生産物の凶

作だったということがあきらかとなったはずである。とすれば政府がこの紛争に費やした戦費等は無駄な行政コストだったことになる。おそらく中央政府ではそのように認識した。

後三年の役が清原一族の複雑な姻族関係のもつれ（実際は安部旧領を南北に分割統治としたが農業生産物の収穫効率に格差があったのが争いの源とみてよい）に端を発したのだとすれば、中央政府がこの内紛に予算を投入して介入したとしても、事態収拾後の国家財政にとっては必ずしもプラスにならないことになる。新たな租税の徴収増は期待できないからである。

財政事情を高所から考える視点を欠いたまま、自らの一族の覇権を東北地方に求めて一地方豪族の内紛に余分な財政支出を求める義家は地方の行政官としての資質に問題あり、ということになったのではないかというのが小生の見方である。このような中央政府の見解が正当なものであるか否かについては、小生には判断するすべがない。

後三年の役が収拾したあと、義家はたしか今の和歌山県の国司に転勤した。これは左遷であろう。手紙を読みながらの義家落胆の図の背景とみる。この時義家は戦費に費やした費用を補填するために莫大な私財を投じたとももの本には書いているが、その通りだと思う。東北地方においては、義家に対する悪評を不思議なほど聞かない。

V. 平泉藤原家三代の繁栄

後三年の役で中心的役割をはたした義家が、あろうことか東北から去っていった。この混乱のあとに陸奥全域の支配を任されたのが藤原清衡だが、この清衡は後三年の後で滅亡した清原氏の内紛の一方の当事者で、もともとは安部一族の有名な貞任宗任の姉妹を母にもち、前九年の役で安部一族に加担して敗れ惨殺された藤原経清を父にもつ。

清衡の母は前九年の役後清衡をともない敵将の清原武則に嫁いでいる。この時清衡五歳と記録されているから、その後の気苦労は想像に余りある。苦労人として成長したのではないか。

もともと清衡の父経清は名門藤原氏の一族に属するから、清衡の血筋が評価された一面はあるにしても、後三年の役のさなかのやりとりのなかで清衡自身が朝廷側から厚い信任を得たものと思われる。

この時清衡と時の関白藤原師実との間に取り交わされた書面がある。清衡が毎年朝廷に上納する献上物の目録が記されており、当局に対するアグリーメントとみられる。つまり、爾後陸奥の支配者となった清衡が誠実に納税義務を果たすので、朝廷としては過激な徴

収手段はとらないといったような申し合わせのような気がする。事実平泉の京都に対する対応は最後まで誠実であった。その後の基衡、秀衡とつづく平泉藤原三代の繁栄は歴史の伝えるところである。

これら一連の出来事は、権力機構の怠慢がいかにかに社会と庶民をいわれもなく苦しみ、腐敗の排除がいかにかに社会を繁栄に導くかを示している。

大鳥井公園を散策するたびに、先人の苦労が忍ばれて、落涙の情に駆られる。

随筆

『楽しい工作の時間』

(財)あきた産業振興機構

専門調査員 亀谷 實



定年後早いもので7年過ぎた。定年を迎えたら、色々やる事一杯あり、退屈なく過ごせるものと現役後半では思い、楽しみにもしていた。しかし現役退いたあとは、生やさしいものではなかった。「毎日が日曜日」は率直なところ退屈そのものであった。緊張感のない毎日は、専門書、小説などなど晴耕雨読で充電しようにも頭に入らない状態である。企業では目標達成のシステムが身に沁みており、急激な環境変化に頭と体が付いていけないギャップを感じた。

対処方法は子供の頃の時間割作成であり、頭よりまずは体を動かす事であった。雪国秋田では冬季間が曲者で運動不足となる。時間割の中でも必修科目は体育と工作の時間である。仁賀保の小さな町でもDIYの店があり、棚づくりの便利な工具やスチールパイプなどが売られている。狭い我が家で整理整頓には立体的にと棚の制作に取り組む。パイプカラー、サイズ、棚段数、固定方法、耐過重など頭に描き、時折アイデアを出したつもりで夢中で制作に取り組み、一応完成し達成感をそれなりに味わう。

完成した棚に整理のためと、これ位はいいだろうと安全荷重オーバーに詰め込む事となる。経時変化無視の予算切り詰めのダブルストッパーなし、接着剤なしの手抜き工事の開発製品、何と数週間後は見るも無残に傾き、家内の失笑を買う羽目になる。

大工仕事も所詮はアマチュアであるが、アイデア、設計、DIYでの材料選定、制作、手直し、どの段階でも楽しい工作の時間である。春季のペンキ塗り、春から秋までの園芸職人と、慣れたらそれなりにPDCAをめぐらし楽しい日々である。

連載

『般若心経とは』



株東北芝浦電子

樋口清行

般若心経の262文字に、仏教開闢以来のエッセンスが閉じ込められている。

その説くところの空なるものを真に体得しようとするれば、まさに生涯にわたる参学が必要となる。

こんな大上段に説かれるとたいていの人は後込みをしまい、OSが固まってしまうので、とりあえずは肩肘を張らないで私のバイアスに波長を合わせていただき、これを機縁にそれでは類書を読んでみようかという気持ちになっていただければ幸いである。

仏教はシャカ以来約二千五百年に亘り人間とは何かということ考察してきた。

それも極限まで論理的思考を推し進め、さらに禅定から得た直感知による洞察で濾過し洗練を重ねてきた。例えば20世紀初頭にユングが提唱した深層心理に於ける無意識の存在は、仏教ではすでに5世紀中頃に、ヴァスハンドゥ（世親）によって考究され、論書として集大成されている。

深遠な宝蔵を持ちながら、この教えの核心が人々になかなか浸透していない。これには救いがたい仏教用語の難解さと檀家制度に胡座をかいて教化を怠っている寺院側にも責任がある。

それならどうやって檀家である市民は切り口を見つけるか、問題意識はあるのだけれど和尚に聞いていいものか、凡夫の身の悲しさと諦めるしかないのか、地図も羅針盤もない茨の荒野で途方にくれるだけである。

それに対して、禅門では疑問には答えず、にべもなく言う、お前は本当にやる気があるのか、ほんとうの知恵（般若）を求めるなら、もう一步踏み込んでひたすらに座禅するしかないのだ、人に教えられては分かることではない、自分自身でうなづきとるしかない。

教えられたことは忘れるが、盗みとったものは体で覚えているものであると。

お悟りなんて言ってしまうばそれまでのこと、発心した人になまじ解答を言ってしまうば後で恨まれる。だから、言わないのが親切なんだと。

それではそんな厄介な般若とはどんなもので、どのようにして据えたらいいのか、手に入れたらどうなるのか、その回答が般若心経にちゃんと書いてあるでは

ないかともいう。

そういうお前は何かという声が聞こえて来る、思い起こせば慚愧の念に耐えない修業をしたことはあるが、ステージは高くない。まあ、登山経験のあるボランティアの山岳ガイド位だと思っていただきたい。

声に出して読む

いよいよ本題に入る、観自在菩薩。行深般若波羅密多時。照見五蘊皆空。度一切苦厄。かんじざいぼさつ。ぎょうじんはんにはやはらみたじ。しょうけんごうんかいこう。どーいっさいくやく。と25文字を一気に唱えると区切りがいい。

寺の小僧にお経を教える時は最初から意味は教えない。まず文字面ではなく、音を捕まえさせ何度も反復させる。これが難解さを克服する最初のアプローチである。音で覚えたら、それに対応した文字の形を覚えさせ、小僧の知的成長に応じて意味を教える、弟子の心の中で中断のないブレイクストロミングを行わせるのである。

古人の言う読書百遍意自ずから通ずはここいら遍の消息をいう。一塊の難解さを小さく分断してとっかかりをつけてやれば理解しやすくなる寸法である。これは真理である、今の教育に欠けているもののひとつ、初めから大容量のファイルを準備させる必要はないのである。小さなファイルを積み重ねれば同じことである。そうすればあらゆる情報のインプットが可能になるということである。

話を本題に戻す、このお経はシャカが高弟のシャリプトラ（舍利子）に教えを説く構成になっており、舍利子に対する呼称が二度も出てくるのに、肝心のもう一人、アバローキテイシュバラ（観自在菩薩）が冒頭に一度出て来るだけなのである。この菩薩の存在が実は大問題なのだ。

このことを指摘して私が何を言いたいか、それはこのお経は殆ど開悟しているシャリプトラに対して、大悟した観自在菩薩が般若の知恵を実践した時に、物事の本質がどう見えるのかということを経々説明しているのであるが、般若そのものに対する論理的説明は皆無である。これは法華経にも見られるが、仏典にはそういう説き方をする特徴があり、この点は初学者をうんざりさせる、とっつき憎さの大原因である。最初から論理的解答を求めて読んではいけない、このお経をかりて、仏典の編集者は何をいわんとしているのか、仏典の成立した当時の社会経済的状況の歴史的考察も併せ行い、想像力をフル回転させる必要がある。イスラム教徒のインド侵入の時代に成立した法華経は、とほ

うもないどんなCGでも画けないようなSFファンタジーを展開している。

話は飛ぶが先日『千と千尋の神隠し』のアニメ映画を観てその切り口の斬新さにえらく感心してしまった。宮崎駿監督という御人はファンタジーをかりて、自己のアイデンティティの欠如した現代人と飽食の時代を巧みに椰揄し、本当に人間が寄るべき「愛」という普遍

的な価値の実践を我々に迫っているのである。子供たちはすんなりと柔軟な感受性でもって喝采している。そこに救いがある、この人には観自在菩薩の眼がある。この柔軟な切り口で、是非、法華経の世界観を描いた作品を製作してほしい、究極的には、そこまで行くはずである。

(つづく)

「ホームページ開設プロジェクト」活動中!

今年度の重点事業のひとつとして設置した「ホームページ開設プロジェクト委員会」は、懸案となっている秋田県支部オリジナルホームページ開設に向けて、鋭意活動を展開中です。

＜委員会メンバー＞

村上 明 委員長 工藤義和 委員 佐瀬道則 委員 荒牧敦郎 委員
石井亮太 委員 堀 辰生 委員 古木 智 事務局

委員会はこれまで4回開催しました。基本コンセプトの討議、他支部等のホームページの閲覧、作成委託先の比較、作成費用の見積もり、コンテンツ内容の検討などを重ねた結果、現在2つの見本パターンを作成するに至っています。

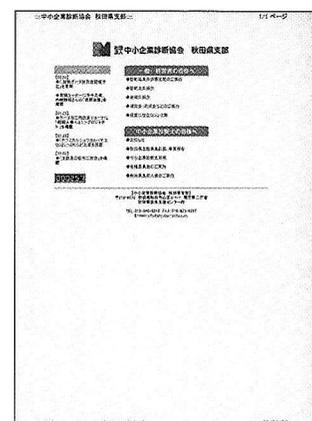
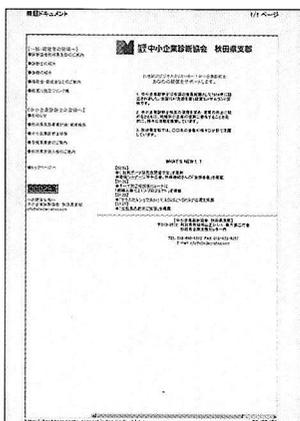
今後さらに詳細の詰めを行い、来年度早々には当支部オリジナルのホームページが完成する予定です。これで「世界に向かって秋田県支部の情報発信ができる体制」が整うことになります。

なおホームページ開設に伴い、会員各位の登録情報の確認はじめ種々ご協力いただかなければならない事項が発生する可能性がありますので、その節はよろしくお願いいたします。



【ホームページ開設プロジェクト委員会】

- 第1回 平成13年7月14日(土)
- 第2回 平成13年9月8日(土)
- 第3回 平成13年12月2日(日)
- 第4回 平成14年3月2日(土)



← 見本 →

平成13年度 支部研修会 開催

平成13年12月2日（土）ホテルメトロポリタン秋田を会場に開催しました。

当日の研修内容は次のとおりです。また研修会終了後、恒例により忘年会を開催しました。

「最近の秋田県内の企業倒産の動向と特徴」	(株)帝国データバンク秋田支店 支店長 高野清司 先生
「秋田県の貿易の現状と課題」 ～貿易を通して見た東南アジア・中国の経済事情～	日本貿易振興会（ジェトロ）秋田情報センター 所長 林 道郎 先生

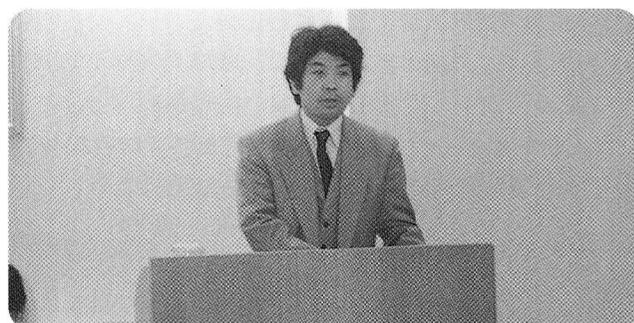


工藤副支部長の開講挨拶



【(株)帝国データバンク秋田支店 高野支店長】

「最近の全国・秋田県の企業倒産の特徴」「倒産事例にみる危ない会社の見分け方」など具体例に基づいた“生々しい話”で、大変参考になりました。



【ジェトロ秋田貿易情報センター 林所長】

「秋田県貿易の現実、実は輸出超過?」「秋田県経済の国際化に向けた視点」はじめ、中国や東南アジア市場の現状についての講義のほか、懇親会にもご出席いただきました。



忘年会での佐藤理事の挨拶



編集後記

- ・ソルトレークオリンピックも終わり、次の楽しみは日韓ワールドカップ?といったところでしょうか。経済波及効果はいかに。
- ・編集担当の都合で今年度は2回の発行に止まりました。ただ今回より、樋口会員が連載に挑戦しており大いに期待しております。会員各位も原稿へのチャレンジ精神をより発揮していただければ…。(佐瀬 記)